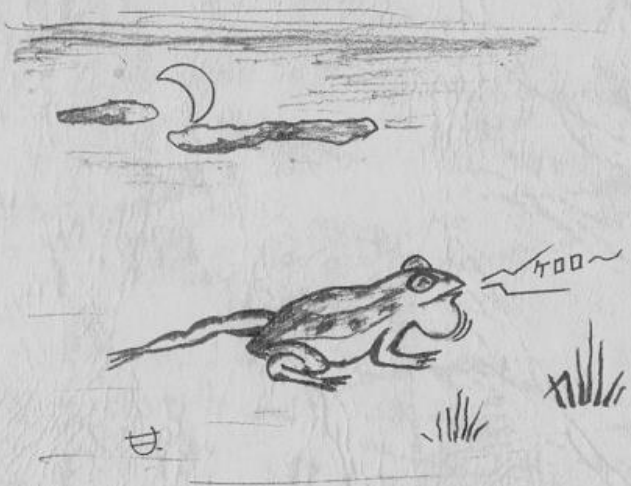


”富士見市の昔話・その参”

『歌うた』

蛙がえる』

甘あまみ
十じゅうちやく樂



“富士見市の昔話・その参”

『歌うた』

蛙がえる』

甘あまみ
十じゅうちやく樂

この話はなしも、婆ばあさまが子こ供どものころそのまた婆ばあさまから、よく聞きかされたものものだそうそうだ。

「はいごめんなさいよ、良吉りょうきちさんはおいでかい」といって、良吉りょうきちと母ははいとふたりの二人ふたり住すまいの小こ屋やの、板戸いたどに手てをかけて顔かおををのぞかせたのは、村むらの世話せわやく役やくの庄兵衛しょうべえさんでした。

「ハイイツ、あつ世話せわやく役やくさんお早はうはうはござござざいます。いつも何なにかかと気きにかけて頂いたきだ有ありがとと難なうなござござざいます。お世話せわやくにななってってっいます。今日けふは朝あささから

雨模様なので、母といっしよに、わら草履でも作ろうかと始めたところなんですよ」と良吉が迎えると、

「それはご精がでること、いとさん良吉さんの作る草履は、はき心地がいいし、長持ちすると村の衆の評判だものなあ」

「ありがとうございます。先日もお口添えを頂いて、街道表のおそば屋さんの軒下に、並べさせて頂いている草鞋が、旅の人が喜んで買って行ってくれるよと、そば屋の旦那にも誉めて頂いたところなんですよ。それも世話役さんのお蔭です。」

「そうかい、それはよかった。それでこそ私も口をきいたかいがあると云うもんですよ。」

「お蔭で生活の足しにもなって助かってます。」と、いとさん共ども、良吉はお礼をいったのでした。

さて、この良吉というのは、新河岸川にほど近いこの地で、秀吉と

いとという仲の良い夫婦の間に生まれ、それはそれは可愛がられ、大切に宝物のように育てられ、三人は幸せに過ごしていたものでした。ところが五才になった冬、お父が風邪をこじらせてあつけなく天国へ旅立っていつてしまいました。その後は母一人の手で、わずかな畑と村の衆の手伝い仕事の間賃とで苦労して育てられたのでした。それでも母の正直で一生懸命に働く姿を見て育った所為か、まっすぐ素直に、近所の手伝いをして骨惜しみをせず働く、立派な十八才の青年にまで育ったところでした。

世話役さんが「今日はね、新しい仕事はどうかと思つて持つて来てみたんだよ。」

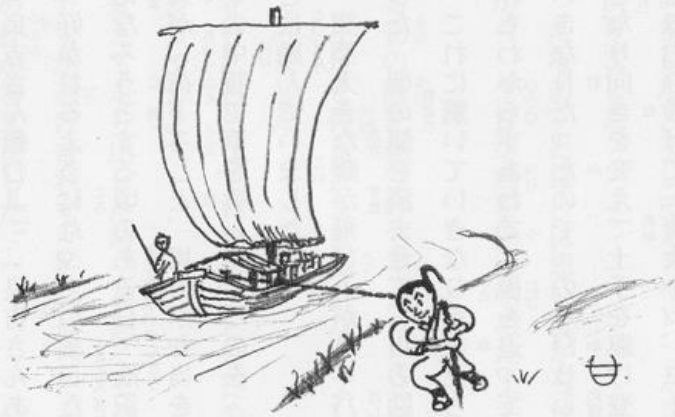
実は、新河岸川の江戸へ行き来する舟便も年々盛んになって、この鵜河岸からの荷積も増えたので、この際、人足をいま一人増やしてみよう、という話になってね、人の荷を扱う仕事だ、正直で物の大切

さのわかる者がいいだろうという事になり、それなら良吉さんがいいだろう。十八才にもなって身体もがっしり、腕や胸にも肉がしっかりとついている。場合によっては、綱を結んで舟を引っぱる”のつつけ”仕事もやつてもらえるんじゃないかということになってね。良吉さんにとつても少しは手間賃になることだし、それで私が話してみようと、こうして来てみたところなんだよ。」

「私でいいんでしょうか。喜んでやらせて頂きたいと思えます。ねえおつ母さん、やらせてもらってもいいですよ。」と良吉がふり返れば「何を云っているの。こんな良いお話しを他の人をさし置いてお前のところへ頂けるなんて、世話役さんに感謝しなければなりませんよ。ほんとうに有難うございます。お役に立つのかどうか、どうぞよろしくご指導の程お願いいたします。」と母もいい、

「どうぞお願いいたします
頑張ります。」と良吉も改
めてお願いしたのでした。

こうして、良吉は舟荷のある日の積み下ろし、大雨の後などの流れの早い日に舟に綱を結び、岸辺でそれを肩に掛けて上流へ引張る。その頃の呼び方で”のつつけ”という力仕事もするようになり、これも蔭日向なく、素直で一生懸命に働い



たので、河岸の衆や舟の衆からも、「良吉さん頼むよ」「良吉さんあ
りがとう」と重宝がられ頼りにされ、好かれるようになっていました。
三ヶ月がたち、若葉がまぶしい夏になろうとする頃のある日、所沢
の奥で焼いた炭の荷駄を曳いて来た馬が、荷下ろしと、馬方が弁当を
使う間のひとときを、のんびりと土手の中腹で草を喰んでいるのを、

良吉は目のはしに入れながらも荷捌きに励んでいました。

その時、静かに流れていた川面に、突然大きな鯉が飛び上がり、パ
チャリツと激しい音をたてて落ちました。朝の餌を済ませて、川の端
の淀みでまどろんでいた鴨の一羽が、これに驚いていきなり飛び立ち
ました。一緒にいた仲間の三羽もわけもわからずあわてて後を追って、
馬の目の前をかすめました。これがいきなりだったので、のんびりし
ていた馬は胆を冷やして、これもいきなり向きを変えて土手を駆け登
りました。馬方も驚いてにぎりめしをほおり投げて「青よーッ、ヨー

シ、ヨーシ、ドウドウ」と止めに追いました。そしてどうやらつかま
えて、周辺はまた前の、のどかさに戻りました。

「今日はそんなことがあった日だったなあ」と良吉は思いながら仕
事を終らせた後の充実感を味わいながら、夕日が西を染め始めた土手
の道を小屋の方へと歩き始めました。

その足元の先に、うずくまっている物の蔭を見つけてギョツと立ち
すくみました。大きな殿様蛙が一匹、左足を伸したまま動けないでい
ます。良吉は腰をかがめて話しかけてみました。

「どうしたんだい、こんなところでもたもたしていたら、とんびや、
白鷺、鳥といった空の狩人につかまっちゃうよ」

「ハイ、実は昼間馬が急に向きを変えて走り出した時、運悪くその
そばにいて、私もとつさに飛んだのですが逃げきれず、その伸びた左
足を踏まれてしまったのです」とその蛙が答えました。

「あー、あの時かい、そんな事があつたのかい。それはとんだ災難さいなんだつたねえ、それで痛いたいのかい、動かうごかせないのかい」と云つて良吉は両手りょうてですくうように持ち上げました。

「あーあ、あの馬おまの重おもさで乗のつかられたんじゃ、これはだめかも知れないなあ、とにかくここにいたんじや鳥達とりたちにねらわれちゃう、私の家へ行つてからにしよう」と云つて急いそいで小屋まで駆け戻りました。

「おつ母さん唯今ただいま、今日はお客きやくさんをつれて来たんだけど」と訳わけを話しました。

「あらお帰り、ご苦労くろうさま様だつたねえ……、えッ、そりやあ大変たいへんだ。どうれ、まず冷ひやしてみておやり」と云つて鹽たらいを出だしてくれました。

良吉は井戸いどから冷つめたい水みずを汲くんでそそぎ、蛙かをそつとその中に下おろし、踏ふまれて伸のびきつている足をやさしくなでてあげました。他の手足てあしを

ばたつかせて痛いたそうにしました。

「痛いたいのか、しょうがない、冷ひたさで痛いたさがやわらぐよう水みづを取り替かえてあげるから、今夜こんやはそれで我慢がまんしてみるんだよ」と云つて外へへ行き、みみずを一匹捕とまえてきて、

「お腹なかもすいてんだろ」と云つて口くちの中なかへ入れてあげました。

こうして二日程ほじ、鹽たらいの水みづを替かえ、みみずや虫むし、芋いもを合あわせてねつた餌えきを与あたえて面めん当とうをみましたが、蛙かの足あしは元もとに戻もどることはありませんでした。だが少しは落おち着ついた様子ようすなので、今度は外へに出でし、小屋こやのそばに土つちを掘ほつて壺つぼを埋うめて巢すを作り、その上に大きな籠かごをかぶせて、鳥とりからも安心あんしんな少し動うごける広ひろさを作り、蛙かをそこに置いてあげました。そして良吉は仕事しごと帰かえりにつかまえた小魚こがし、小えびなんか練ねり餌えに加くわえ、「特製とくせいだぞ、喰たべてみな」といつて籠かごの中なかへ入れてあげる毎まい日を

過ぐすようになつていまし
た。

そんなことになつて七日
程たつた夜、良吉が「明日
も舟荷がある日だ、早く寝
ようかな」と床に入ったと
き

「ケロツケロケロ、ケロロ
ローツ」と大きな声を耳に
しました。「あッ蛙の声だ
ッ」と、とんでいつて戸の
すき間からのぞいてみると、
あの蛙が鳴いていました。



澄んだ良くとおる声でした。

「おーッ元気になったのか、よかつたなー」良吉は飛び出して行つ
て籠に手を置いて話しかけてあげました。蛙は頭を一度下げるように
して

「ありがとうございます。お蔭様でなんとか鳴く元気を取り戻すこ
とが出来ました。左足の不自由は治らないかも知れませんが、良吉さ
んに助けて頂いたこの命、なんとか大切に生きてみたいと思います」
しつかりした口調でいいました。

「よしッそれでこそだよ、でもまだ素早い動きは無理だろうから、
しばらくはそこで動く練習をしながら過ぐしてごらん」と良吉がいい、
蛙も「ありがとうございます。ではもう少し甘えさせて頂きます」と
いい、夜が来ると「ケケケー、ケロケロツ」と鳴く声が段々元気が
増し、その内、蛙とは思えない「ホー、ホーッ」や「キーッギョーッ」

といった声まで出すようになっていきました。

ある夜、良吉が例によって籠に手をかけて話しかけました。

「お前は色々な声で鳴けるんだねー、違う蛙も来ているのかと思えてしまうよ」

「ハイ、お言葉に甘えてここで練習させて頂いています。実は私は幼い頃から声が良いと仲間内で誉められていまして、おだてられて練習してみると、蛙の種類によって違う、ほほを脹らませて出す声も、喉袋を脹らませて出す声も、お腹を脹らませて出す声も、私にはどれでも出来るようになって来たのです。それでこの春には『ホーホケキヨ』と鶯の鳴きまねまで出来るようになったのです。だから、なんとかこの得意技で良吉さんにお礼が出来ないものかと、ご迷惑とは思いますが大きな声で練習を始めたところなんです」

「いやーツきれいな声で仕事の後の身体が癒されるよ。お隣りさんも離れていることだし、遠慮することなんかないよ、どんどん練習していいよ…… そうだね、それならこんな一緒に暮らして名前のないのも不便だから、これからは声のよいお前のことを、”歌吉”と呼んでもいいかい」

「有難うございます。”歌吉”うれしいです。これからはどうぞそう呼んでください」

それで練習の先の事なんです……、良吉さんはご存知かどうか……、実は仲間内では聞かされているのですが、水無月（六月）の最初の友引きの夜に、般若院の修験様の脇の原で、毎年”蛙の鳴き合せ”が行われていて、周辺の鳴き自慢の蛙が集るそうなんです。出来れば私もそこへ出てみたいもんだと小さい時から思っていました。こ

んな身体からだになつてしまつた私ですが、今でもその思いは捨てられませ
ん」

「そんな事をやっていたのかい、ようし、お年寄達としよりたちにも聞いてみよ
う、望みのぞは捨てちやあだめだよ」

こうして良吉は次の日から調べてみると、確かに般若院くわんおんの講こうの衆しゅうの胆きも
煎いりで、脇わきの原はらで行いわれている行事ぎやうじで、周辺しゅうへんの鳴なき自慢じまんの蛙かを飼かつて
いる旦那衆だんなが集あつまつて、どの蛙かが一番いちばんかを、入れ札いれふだをして決きめるといい、
聴きくだけに集ある人も含くめ、入れ札いれふだの権利けんりを得える参加料さんかりようとして、收穫しゅうかく
した米こめ・芋いも・野菜やさい・果物くだもの等を両手りょうてで一杯いっぱいぐらいずつを供そなへるそうで、そ
の結果けつ、一番いちばん人気にんきを得えた者がその全すべての供そなえ物の半はん分ぶんを、二番にばんがその
二割にわりを、残りのこ三割さんわりを社やしろに貢物みつぎものとされるのだそうです。

「歌吉うたきち、わかつたぞーッ今年ことしの鳴なき合せ会えまであと二十日はつかばかりあ
る、何なにんとしても私が連つれて行いつてあげるから、頑張がんぢつて練習れんしゅうしてご

らん」

それから、一人と一匹ひととひとひきは力を合せ、良吉りやきちは歌吉うたきちの体力たいりよくがつくよう
にと例たとの特製とくせいの餌えさに工夫くふうを加くえたり、歌吉うたきちは左足ひだりあしをひきずりながらも
這はい廻まわつたりして身体からだも鍛きたえ、夜よになると、ほほを、喉のどを、お腹おなを脹は
らませ高い声たかいこゑ、低い声ひくいこゑ、といろいろ試ためしてみたりと練習れんしゅうを続つづけました。
そしてついにその日が来きました。朝あさから雨模様あめようで舟荷ふねがらの少ない日ひで
仕事を休やすむことが出来たのも幸さいわいいして、朝あさから歌吉うたきちのそばで良吉りやきちが世
話をすることも出来たし、参加料さんかりようとなる供そなえ物は、前まえの日ひまでに夜な
べで作つくつた草履くさづみを三足用さんそくよう意いすることも出来ました。

夕方ゆふがたの修験しゆげん様の脇わきの原はらは、見物けんぶつの衆しゅうもぼちぼち集あり、緊張きんちやうした空くう気き
につつまれ、そんな中なかを旦那衆だんなに連つれられて、周辺しゅうへん各地あちこちから蛙かが集あま
りつつありました。江川えがわからは牛蛙うしが箆ざるに乗のせられて、大井おおい弁天べんてんの森もり
からはカジカ蛙たらいが小さな盪たらいに乗のせられて、柳瀬川やなせがわからはがま蛙がま、あか

蛙、南畑からはひき蛙に青蛙、と続々と集つて来ました。

近くのお寺のゴーンと鳴った暮六つの鐘を合図に勝負が始まりました。しかし蛙のことで、すぐに一斉にという訳にもゆかず、しばらく間があり、「ケロケロツ」と一匹が鳴き、それにつられるように「クワックワツ」「カカカーツ」「ギヤツキヤツ」「ゴー、ゴー」「モオーツモオー」「ケケケケエー」と鳴き合せて来て、皆んなが聞きほれはじめた、そんな中「ホーホケキョー」と鳴き声がして、皆んながその声の方へ目をこらしました。それが歌吉の声だったので。

こうしてひとしきり鳴き合せた後、また静かになり、ころあいを見て胆煎りさんが「これより入れ札を行います」とふれ、その結果はやはり去年同様カジカ蛙が一番となりました。一番をとった蛙は二回までしか参加できないそうで、大井弁天の伝統ある優勝の何代目かの蛙

になるのだそうです。歌吉は残念ながらその次の二番でした。でも初めての参加としては快挙であり胆煎りさんから「正統派ではないが珍しい新しい試みです」との特別講評を頂きました。

こうして良吉・歌吉組は供物の二割の配当を得て、持ち込んだ草履の内の一足と米や野菜を一籠ほど背負って帰ることができました。いつか雨は本降りになっていました。この地域では鳴き合せ会が終ると梅雨が始まると伝えられていました。

「良吉さんにお礼がしたかったのに悔しいです。来年こそ一番になつてみせます」小屋に帰つた歌吉は涙をためて云いました。

「沢山いた中で二番なんて凄いことだよ。私にはお前の声が一番澄んできれいに聴こえたよ。それにこんなに沢山おみやげをもらえて、お母さんも喜んでくれているよ」良吉は歌吉の健闘を讃えねぎらつた

のでした。

その後歌吉は、少しは身体を動かせるようになっていたので、籠をはずしてもらい自分で餌を探すようにしていました。ただ埋めてもらった壺はそのまま巢にして出入りし、夜になると来年に向けて声の練習を怠らないのでした。

良吉も河岸仕事に精を出し、舟の衆とも仲良くしてもらっていましたが、いつの頃からか、流れに乗って江戸へ向う舟頭さん達が、「ハアーツ九十九曲りエー仇では越せぬ、通い舟路の三十里、アイヨのヨトキテ夜サガリカイ、キタサー、ヨイサー」と歌う新河岸川舟歌にひかれていきました。川面を渡って、たおやかに流れるその調が耳から入って頭を揺らし、いつしか良吉の口もそれをなぞるようになって行きました。

それは小屋にいて草履を作っている時でも「ハアーツ主が棹さしや、

私はともでござ飯焚き焚き舵を取るー」と他の歌詩まで口ずさむようになり、「好きこそ物の上手」のたとえの通り、どんどん名調子になっていきました。

そして季が過ぎて、春が来て冬眠からさめた歌吉が最初に耳にしたのが、その良吉さんの舟歌だったので。

ピンときた歌吉は「これだ」と思い、良吉が小屋の中で口ずさんでいるときは、必ず戸口にくつついて聴き耳を立てていました。

柳が芽を吹き、風が薫るようになったある日、

「良吉さん、今年も是非鳴き合せに出して頂きたいのですが。今年良吉さんの歌っているその舟歌をやってみたいと思いますが、一緒に練習してもらえないでしょうか」

「エッ、小節もあれば伸ばしもあるのです、蛙の声では難しいかも知

れないけど、お前が云い出すのにはそれなりの覚悟かくごと自信じしんがあつてのことだろう。ようし一緒にやつてみようか」と良吉も賛成さんせいし、その夜からまた一人と一匹の長く苦しい合同練習ごうどうれんしゅうが始まりました。そしてつらくもあり楽しくもあつた一ヶ月がたち、ついにまたその日がやって来ました。

今年も周辺の蛙達が緊張の中にも自信ありげに旦那に連れられて集まつて来ました。良吉も歌吉をふところに去年きょねんと同じ草履を三足持つて参加しました。

暮六つの鐘を合図に鳴き始め、ひとしきりしたところで歌吉が「ケローツ」と始めそれに添そえて良吉がまわりの蛙の迷惑めいわくにならないようにと、小さな、しかし伸びのある声で「九十九曲り」と合奏がっそうし、二番に入って良吉は口くちを閉とじ歌吉だけが「ケロー、ケロケローオ、クワ

アア、クケーエ」と歌い響ひびかせると、それはまるで良吉が言葉を添そえているかのような舟歌そのものでした。聴いている衆は、驚おどろきの中にもうつとりと耳を傾かたむけています。

この見物衆けんぶつしゅうの中に一人、川越東照宮かわごえとうしょうぐうの参詣さんけいの帰りかえに、蛙の鳴き合せうわさ“の噂うわさを聞いてこの地で舟を降おり、立ち寄よつたという、江戸は目



黒のお不動様の前で茶店を営みながら、俳諧師としても一茶の句会等にも参加しているという人が、旅先のことでも供物もないけれどいつて短冊を一本

「梅雨呼ぶや 水処蛙の 鳴き合せ・一水」
としたためて供えていただきました。

入れ札の結果は、南畑の青蛙が、小さいのに良く響かせたとして一番となり、歌吉は残念ながら二番でした。それでも二年連続で賞品を受けることも珍しいそうだし、蛙には困難な音律を聞かせたということで大層な評判を得ました。

「良吉さん、あんなに一生懸命一緒にやって頂いたのに、また一番になれず、賞品でお返し出来ず申し訳ありません」小屋に帰って悔し涙で歌吉が云えば、

「いやーあ、評判では一番だったよ、賞品なんて二番賞で充分じゃ

ないか、それに私も一緒に楽しめたし、去年より本当に緊張する心地良さを、お前のお蔭で味あわせてもらったよ、ありがとうよ」と良吉も逆に歌吉にお礼を云い、互いにいたわり合うのでした。

そして例年のように、この地にも梅雨が始まりました。
七夕が過ぎた頃

「ごめん下さい。良吉さんのお宅はこちらでしようか」と訪ねて来た初老の人がありました。いとさんが草履造りの手を休め、

「ハイッ、良吉は手前どもの件ですが、何か？」と出てみると、その人は江戸の芝居一座の番頭だといひ、座長にたのまれこの地まで訪ねて来たのだと云う。

「それでは私が伺っても何ですから、河岸に出ている件を呼んでまいりましょう」と走り出ようとすると、その人は

「いや、それなら私の方から河岸の方へ伺ってみましょう」と云つ

て小屋を離れました。

訪ねて来たその人に会った良吉は、仕事のあい間をみつつけて川岸の土手に腰を掛け、話しを聞くと

「座長とこの地を訪ねた俳諧師の一水さんとは馴染みの仲で、旅のみやげ話しに歌う蛙の話しを聞き、興行師の直感に触れ、新河岸川舟歌は、その舟が江戸に入つて最初に着くのが千住河岸で、その酌婦さん達が舟頭さん達の節をまねして、千住酌婦は錨か綱か、上り下りの舟とめる“と酒の友として歌うので江戸では千住節などとも呼ばれて、ある程度は知られている。これを蛙が歌つてくれればお客を呼べる。番頭さんは非お話しをまとめて来ておくれということで、こうして私が伺つたという次第です。どうかこの老人を助けると思つて、まげてご承諾の程お願いいたします」と云うことでした。

良吉は「これは困つたな、歌吉に活躍の場を与えてあげたい気もするが河岸の仕事もあるし」とその人は「河岸のお仕事の方でしたら私の方で交渉させて頂きますから」と、

「いやまつて下さいよ。母にも世話役さんにも相談してみてもいいと何んとも云えませんねえ」と良吉は云つて、おつ母に話した上で次の日世話役さんを訪ねました。

「おつ母も世話役さんに相談してみても云うので困つた話しを持つてまいりました」と頭を下げました。すると世話役さんは、

「実は昨日、江戸から早飛脚が来てな、良吉さんをお望みの座長さんというのは、今浅草奥山の常盤座で興行を打っている人で武蔵屋政吉さんといつて、私もちよつとした知り合いでね、そこからご丁寧なご挨拶状を頂いたとこなんだよ。まあ、あの座長なら安心して預け

られるよ、江戸を知っておくのも人生にとって良い勉強になる。修行だと思つて行つてみてはどうかね。仕事の事もおつ母さんの事も、後の事は万事この庄兵衛に任せてみないかね」と勸めてくれました。こうして歌吉にもよく話して聞かせ、三日目に身の廻りの片付けを終らせ、訪ねて来た番頭さんと共に舟で江戸へ向うことになりました。河岸にはおつ母をはじめ世話役さんや河岸の衆も「元気で頑張つてこいよう」と送つてくれます。「じゃあ綱をはずすよ」と顔馴染みになつていた舟頭さんが舟を出してくれました。

「良吉さんの舟歌も本物になつたようだね、一緒に一丁やるか」と舟頭さんが歌い始め、良吉もついて歌うと、ふところの歌吉も「そぞそと動いて外に出してとせがみ、舟板に下ろしてやると、例の「ケロ」と合せ始め舟頭も喜んでほほ笑むし、番頭さんも涙をためてうなづいているし、乗り合せた他の客も手をたたいて喜んでくれました。

初めて見る江戸です。良吉は自分のことよりも、水が合うだろうか、食べ物は大丈夫だろうかと歌吉の事が心配でした。

浅草河岸から上つた良吉達は、観音様をお詣りしてから奥山の一座に到着しました。座長の政吉さんに引き合わされ

「良吉と蛙の歌吉です。よろしくお願ひいたします」と挨拶し

「おーおー、良く来てくれましたね。慣れない舟旅でさぞ疲れただろうね、番頭さんになんなりと聞いて今日はゆつくりして下さいよ」と、にこにこことまるで恵比寿様のような顔で云われたので、良吉も少し安心したのでした。

翌日、番頭さんに云われたとおりの時刻に起きると小屋の皆さんに紹介され、早速先輩達について掃除から芝居道具の手入れ、舞台の仕掛け等と、忙しくお手伝いをしました。これも素直に骨を惜しまず動くので、皆さんも心良く受け入れてくれたようですし、奥ののれんの

あいだ
間からこの様子ようすを見ていた座長も、ひそかにほほ笑えんでくれていま
た。

午後ごごになつて初舞台はつぶたいがやつて来ました。

「サアーサ、いらつしやい武州水子ぶしゅうみずこで評判ひやうばんの歌う蛙かまがやつて来たよ
ーツ」と威勢いせいのよい呼び込みよこさんの声が響ないて、芝居中場なまはの幕間まくまに、
舞台中央ぶたいちゆうに大きな盥たらひを据すえ、少し水を張はつてその真中まんなかに歌吉かまが構かまえ、
まわりに芦あしや草くさの鉢はちを飾かざり、その脇わきの椅子いすに良吉りやうきちが座まり、照明しょうめいは少し
暗くらめで夕暮ゆうぐれの雰囲ふんいき気きを出いし、それは歌吉かまの氣持きもちちを落着おちつかせる効果こうか
にもなりました。そして大道具だうぐさんの持もつガン灯とう(明あかり)が良吉りやうきちと蛙かま
を照てらし浮うかかび上あがらせました。良吉りやうきちが膝ひざをポンと叩たたくと「ケローツ」
と始まり、良吉りやうきちが「九十九曲くじゅうじゅうきやくり」と続き、二番にばんに入いつて良吉りやうきちは口くちを結むす
び、歌吉かまだけが「ケロークワクーウ」とまるで言葉ことばが流ながれているよう

な、いつもの調子ちようしを出すことが出来ました。

”天才歌蛙てんさいうたがえる 現あらわる”と次の日かには瓦版かわらばんが江戸えどの町まちに舞まい、これを
聴きき逃のがしちや江戸えどっ子の名ながすたる、とまでいわれるようになりま
した。

「有難ありがたうよ、お前まへさん達たちのお蔭かげでこんなに沢山たくさんのお客きやくさんが来てく
れているよ」と座長ざちやうは舞台ぶたいそでから客席きやくせきをのぞき涙なみだを浮かうかべて喜んで
くれましたし、一座いざの皆みな人も良吉りやうきちのいつまで経へつても素直すぢで謙虚けんこな
人柄ひとがらにほれていたの、その成功せいこうを喜んでくれました。

こうして一ヶ月いっかげつ近い公演こうえんを経て、江戸市中えどしちゆうの評判ひやうばんも益々ますます高たかまつてき
ていましたが、良吉りやうきちは、歌吉かまのその声こゑの張はりが前まへと少し違ちがうような氣き
がして心配しんぱいになり、例れいの特製とくせいの餌えさにも氣きを使つかつて調合てうがひしたりしていま
した。

「どうだ、疲れたら休ませてもらってもいいんだよ。どこか変だと思つたら何んでも云うんだよ」と良吉が聞くと

「私なら大丈夫ですよ。もう少しで一座の江戸公演も終り旅廻りに出るんですよ。良吉さんこそ頑張つて下さいよ」とそのつど云い返されるのでした。しかし、歌吉は良吉には心配をかけまいと明るく振舞つていましたが、ときどきお腹が痛んで息が充分吸い込めないようなことがあつたりして、うすうす余命が少なくなつて来ているような気がしていました。良吉に会う前一年をこえて成長していたし、会つてからこうして二回目の夏を過ごしています。蛙の寿命が何年なのか歌吉自信知るよしもないし、まして片足が不自由の身、でも歌吉は決めていました。「本来なら馬に踏まれて間もなく死んでいて当然の命。良吉さんが助けてくれたからこそこうして長らえ、鳴き合せ会に出ることが出来たばかりでなく、江戸にまで連れて来て頂き、自分でも気

に入っている喉を皆さんに聴いてもらえることが出来、そして良吉さんに少しの恩返しもできている。このまま皆さんに喜んで頂いていることが、自分の生きた意味でもあるし、証しにもなる。このままできる限り続ける事が、自分自身に悔いを残さない生き様なのだ」と。涼風がたち、初秋の虫が鳴き始めた次の朝、それは一座が次の地を求めて旅に出る朝でもありましたが、良吉が起きてみると、歌吉は仰向けになつて悪い左足をいたわるように、伸ばした右足の上に乗せ、眠つたきりに息絶えていました。

天才歌蛙 天に還る “と瓦版は書き、心ある江戸の衆が、花や線香を持つて小屋の前を飾つてくれました。

座長が話があるそうだよ、と呼ばれて良吉がその前に座ると

「実はな、亡くなつたお前のお父の秀吉というのは、私のたつた一人の弟なんだよ。死んだ時は、私もまだ修行の身で地方を歩いていた

ので、すぐに駆け付けて上げられなかった。それが心残りだったが、その後、おいとさんに何んでも力になるから云っておくれ。少しの仕送りならさせてもらうよ。と申し出たんだがな、おいとさんは（有難うございます。お兄さんのお心は有難く頂戴しますが、是非良坊は、私一人で精一杯育てさせて頂けないでしょうか）と云われてね、私も旅を廻る身、それ以上は言えず、おいとさんに任せ、以来ご無沙汰になつていたのだがね。私もどうやらこうして一座を束ねられる身になり、良吉さんともご縁が出来た。歌吉のことは残念だったがこれもまた縁、幸か不幸か私には子供がない、良吉さんは実の子とも思っているよ。どうかね、修行と思つて一緒に旅に出てみないかね」と云うものでした。

武蔵屋という屋号も武州鶴馬の出から来たものだったし、だから里

の世話役さんともつながりがあつたのでした。

こうして良吉は、歌吉に似せた木彫りの蛙をふところに、朝夕取り出しては手を合せながら旅に加わりました。そして後には母をも呼び寄せ、終には、座長を継ぐ事にもなつたのでした。

さらに後になって、こうなつたのも歌吉と出会つたのが始りだったと、故里の般若院修験様の鳴き合せの行われた原に、大きめの蛙の木像を置かせてもらいお礼のお参りをしたのでした。

『時を経てこの木像も土に埋もれたのか朽ち果ててしまつたのか、今では探しようがない。』

だが、修験様は、水宮神社と名も改まり、他にもいろいろ蛙に縁があつたが故か、先頃は狛犬ならぬ狛蛙の石像まで出来て、その社前が

昔話 「歌 蛙」

発行 2007年12月1日
著者 甘 十楽 (あまみ じゅうらく)
印刷・製本 志賀堂印刷

※筆者の甘 十楽氏の了承を得て
同冊子をコピーして開示しております。

まも
守られ風格がかもしだ
されている。

そして歌が上手にな
るようにと願う、近隣
のカラオケ教室に学ぶ
人の一部が、手を合せ
に寄るのだそうである。

また、新河岸川舟歌

は毎年四月二十九日に、

とうじょうせん
東上線新河岸駅に近い旭橋、日枝神社を中心に行われる「新河岸川ま
つり」で、その伝承が披露されている。』



— 終り —

